

第13回一関市総合教育会議 会議録

- 1 会議名 第13回一関市総合教育会議
- 2 開催日時 令和3年7月7日(水) 午前10時00分から午前11時30分まで
- 3 開催場所 一関市博物館
- 4 出席者
 - (1) 構成員
勝部修市長、小菅正晴教育長、千葉和夫教育委員、佐藤一伯教育委員、伊藤一志教育委員、桂島加奈子教育委員
 - (2) 事務局等
市長公室次長兼政策企画課長、政策企画課政策推進係長、まちづくり推進部いきがいくくり課長、教育部長、一関図書館長、教育部次長兼教育総務課長、教育部次長兼学校教育課長、教育部次長兼文化財課長兼骨寺荘園室長、一関市博物館長、一関市博物館次長、教育総務課庶務係長
- 5 議題
博物館運営の充実について
- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 報道 2社
- 8 挨拶
市長挨拶

本日で第13回目を迎えます。これまでかなり広範囲なテーマにわたって、いろいろ教育委員の皆様方と意見交換をさせて頂いた。非常に有意義な会であると受け止めている。岩手県の中でも、それぞれの自治体によって総合教育会議の内容は若干違う。それぞれの自治体の特色を生かした形でやるというのが原則であるので良いが、一関の場合は広く地域社会、学校現場というのが真ん中にあり、それを取り囲むように地域社会がある。そういう地域社会というところにも、足を踏み込んで、いろいろ協力をさせて頂いてきた。

このやり方は非常に今後とも継続していくべきと思っているところである。やはり学校現場の中の問題、それももちろん重要であるし、地域の中にあるの、地域の教育というのも非常に大事である事から、地域社会、地域全体で子供達を支えていくという部分が、より重要になっていくと感じる。

本日も、この身近な博物館という場所で会議を開いているわけだが、個人的には企画展の時などは何度も来て見学しているが、いざ改めて、普段見られない場所に案内されると、全く新しい部分を発見することが出来るし、非常に今後、この博物館というものをどういう形で充実を図っていくべきか、そういう事も改めて考えさせられるところがある。

皆様方からは、博物館に関して大きいテーマがあるので、どういうことでも結構なので、様々なご意見をお聞かせ頂いて、少しでも一関の博物館を次の世代に引き継いでいく時に、有意義に働けばいいと思っている。

9 懇談

教育長 「博物館の充実について」と言うテーマで、みなさんのお話を伺うが、今日は博物館の館長の菊池勇夫館長にも会議に加わって頂いた。

先ほどは普段見られない博物館のバックヤードを見せて頂いて、いろいろ考える事があったと思う。今度の7月10日からテーマ展として行われる「芭蕉と真澄」のまさに今その準備の渦中のところを見せて頂いた。そして今は別室で、来年の1月2月3月あたりに展示を公開して頂けるようだが、「佐藤紫煙」の屏風を見せて頂いた。なかなか普段見られない部分もを見せて頂いたので、今日の話し合いの最初は、どこについてでも良いので、今見ての感想や普段博物館について思っている事や考えている事等を織り交ぜながら、お話を伺えればと思っている。

千葉委員 今、見せてもらった中で、まず収蔵庫というのを初めて見させて頂いた。大変貴重な、二度と見ることのない、我々には出来ない様な所を見せて頂いて、これほど大事に資料が保存され、そして十分に活用できるような状態にされているという事は、お金も相当かかっているだろうし、何をどこに置いたかきちんと把握しておかなければならないだろうし、大変なことだなと思った。

また、例えば、いろんな方から農具や千歯こきなどを寄贈された時に、保存しきれない部分もいっぱい出ているのかな。それから古文書などがいろいろな所から出てきた。これを読んでくれ、貴重な物かどうか見てくれと言われた場合に、これもかなり学芸員の方々は大変な作業になるのかな。普段の業務の他にそれをプラスαでやっていくというのは大変な事だと感じた。

また、先程、屏風が下絵の部分から、あのように伸ばして大変すばらしい物を作り上げたという事、そして本物の屏風の完全なる下絵になっているのは確認できたという事。いろんな文化遺産の保存に博物館というのは欠かす事のできない役割を果たしていると強く感じさせて頂いた。

佐藤委員 先程は収蔵庫と「佐藤紫煙」の大作を拝見させて頂き、ありがとうございます。一関市博物館の収蔵庫を見学させて頂いたのは初めてである。

私は今、地元の神社に奉仕しているが、その前は平成6年から平成21年3月まで東京の明治神宮に奉仕していた中で、平成9年10年のあたりに宝物殿という博物館相当施設の担当だったこともあり、当時祭儀部というお祭りをする部署を担当していて、内部異動で文化館という新しい展示施設をつくるための臨時的な仕事だったが、宝物殿で現在、国の重要文化財になっているが、当時はまだそういう指定のない建物で、建造物は大正11年だが、中央に展示用の「中倉」という施設があって、両端に「東倉」「西倉」、これが収蔵庫だった。今日、木造の収蔵庫を拝見して、造りが宝物殿以来で、非常に懐かしく思い出した。

やはり大正時代のそういう収蔵の施設を、現在の最新施設は空調の管理の仕方等はこちらの方が進んでいると思うが、物を大事にするという考え方は昔と今と変わらず木の収蔵庫を使っているというのは、共通点があると感じた。

SDGsによると、全ての人に質の高い教育というのがありますが、まさに博物館は大事な教育を広く全ての方にといいところを、いかに体現していくかの施設なのかなと言うところも普段感じているところである。

桂島委員 今日、貴重な資料をたくさん見させて頂いた。何回か博物館には企画展等にも何度も来ているが、企画展の整った場面はよく見るが、用意をしているというところを見る事ができて、こうやって皆さんが用意して、ああいうふうに企画展が出来上がっているのだと、本当に今日来て良かったなと思っている。

それから毎回、博物館に来るたびに新しい発見があって、「和算」のコーナーに行くと時間を忘れる位、全部問題を解ききれなくて諦めて帰る。毎回、「学ぶ」というワクワクする気持ちを思い出させてくれる場所だなと思って来させて頂いている。

先程も話があったが、教育の場として大変貴重な場所だと思うので、ぜひ小さいお子さんから私達の上の世代の方まで、皆さんに博物館の素晴らしさ、特に一関の人物だったり、私は一関の生まれではないので、ここに来るたびに一関の方の知識を得る事もあるし、その知識を皆さんにぜひ幅広い世代の方々に伝えて頂きたいという事と、この博物館の素晴らしさをどうやったら広められるのかと来るたびに感じるが、「行った方がいいよ」と言う位しかできないが、ぜひ幅広い世代の方々に来て頂きたいと思っている。

先程、佐藤紫煙さんの屏風を見させて頂いて、最近、新型コロナ感染の件でも、私も仕事の方に忙殺される場面がたくさんあるが、最近、物に対して感動する機会が減っていると自覚していて、佐藤紫煙さんの絵を見て、完成品よりも下書きの方に感動してしまい、紫煙さんには申し訳ない。下書きの方に、本当の最初の素晴らしい屏風が出来上がる前の、最初の段階を見れるという貴重さと、こういうふうにしてこの素晴らしい作品が出来上がったのだなという事に非常に感動して、自分にもまだ感動する気持ちが残っていたんだという事を再認識させて頂いた。本当に今日、来て良かったと思っている。良い機会を与えて頂いた。

伊藤委員 今日見させて頂いて感じた事は、博物館の運営というのは、博物館員の人達が細かな手立てを組んでいて推し進めているという事を改めて感じた。

博物館というと、私自身は今まで、修学旅行や遠足に行つて博物館に立ち寄る。実際博物館に何が展示されていてという、興味関心の分では、正直あまりなかったような感じがする。だから、例えば一関市の博物館のみならず、東山の「石と賢治のミュージアム」、「芦東山記念館」、こういう所にも身近に偉大な遺産があるのに足が向かない、心が向かない。これは私達の大きな認識不足や課題だと思う。身近に感じられるような博物館であれば、なおいいかなと。それにはどうすればいいのかというような事を考えていきたいと思う。

この一関市の博物館、素晴らしい手立てで一生懸命にいろいろな事をやっているという事が感じられた。

先程、桂島委員も言っていたが、私達65歳以上は市の特別な計らいで、自分の身分証を証明すると入館料は無料である。「石と賢治のミュージアム」も「芦東山記念館」も、藤沢の大籠の「キリシタン殉教公園」の入園料も無料であるという事で、すぐく市からも配慮して頂いていると感じている。

教育長 私も感想をお話させて頂く。「和算」の話だが、下のバックヤードに行った時、相馬学芸員にそろばん玉を見せて頂き、そのそろばん玉は確か下が6つ、上が3つという珍しいそろばんであった。普通のそろばんの使い方ではないかもしれない、あるい

は天文学的な部分の学問に使ったのかもしれないという説明であった。そうしたらある委員が、「小学生にこの使い方を考えさせたら非常におもしろいのでは」という指摘があった。やはり博物館にそういう珍しい物があって、それをどう活用するか、どう見せるかというのは、アイデアの世界というのは大きいのだろうと感じた。

もう一つは、バックヤードに行った人しか見られないと思うが、下にベンガルトラがいる。ものすごく大きな大迫力のトラであった。この博物館が出来た時に、ある方が寄託して、貸しますよという事で展示した事があったらしいが、ものすごい迫力であった。それにも度肝を抜かれた。

この博物館にそれがあるかと考えた時に、確かにこの博物館は自然系ではない。どちらかというとな文系の博物館だから、そのベンガルトラとのマッチングという部分では非常に難しいのだろうと思った。

しかし、私はこの博物館が好きなのは、刀剣や和算や蘭学、辞書、他の博物館にはほとんどない物を展示して売りにしているという部分では全国でも珍しいのではないか。こういったジャンルのももの取り扱っている博物館は、いろいろな都市に行った時にできるだけ博物館や美術館には足を運ぶようにしているが、他の博物館にはない。そういった特徴を生かすというのは、この博物館にとってすごく大事な部分になっていくのではないかと感じた。

市長 私も皆さんと同じようにびっくりする部分が、想定していた以上に大きいものがあった。特にベンガルトラについては、見た途端、ライオンと同じ位の大きさなのかと思っていたら、全然違う。大体馬と同じ。あんなに大きいトラというイメージがなかったからびっくりした。

それから収蔵庫を見せてもらったが、現在そこに保管している様々な物は、資産容量がどれ位なのかと質問をしたら「もう既に100%超えているかもしれない」という事で、だいぶ苦勞されながらやっていらっしゃるなと感じた。そういう課題も、普段我々が目にできない所なので、しっかりと認識しながら対策をしていかなければいけないと思う。

やはり市民の方から様々な要望が届いている。博物館の中に美術を専門に、絵画などの部屋を作ってほしいとか、独立した美術館もほしいとか。博物館という物に対する期待の大きさとも取れる。その辺も私達は、博物館にしても美術館にしても、先人を顕彰する施設にしても、考えていかななくてはならないと思っている。そういう所に対しても委員の方々からのご意見も時間があれば触れて頂きたい。

いずれ、博物館の現状を見せて頂いたという中で、我々は普段は展示された物を見るが、そこに至るまでの準備段階、場合によっては借りてこなくてはいけない物もあるだろうし、交渉もあるだろうし、実際に借りに行つて運んでこなくてはいけない。そういう時の学芸員さん方のご苦勞は大変なものだろうと思う。そういうところも踏まえて博物館というものを見ていかななくてはならないと改めて思った。

教育長 菊池館長さんには、当館の館長になって頂いて4年になるが、これまでの部分を含めて感想等頂ければ幸いです。

菊池館長 教育会議で博物館の運営についてテーマにして頂き感謝申し上げます。展示施設や収蔵庫をご覧頂き、感想ご意見を述べて頂いた。博物館の役割は地域との結び付きとい

う事をあげられていたが、やはり地域の宝を預かって、きちんと保存して後世に伝えていくという、一番大切な基本的な役割かなと思っている。佐藤紫煙の作品の中で、戦後の農地改革の時期にどっと昔の物が出て、相当なくなっている。そうした危機が今続いているのではないかと思う。というのは、後継ぎの方がいなくなるとか都会に出て行ってしまい、実家がなくなってしまう。そういう中での文化財の散逸、消滅が現実に行進していると思う。そういった事をできるだけ食い止めて、そういった物を博物館で預かって保存して後世に伝えていく。これが一番大切な事だと思う。

やはり、収蔵やあのスペースではとてもまかないきれない。そういう問題がある。それからお話を伺って感じたのは、地域人にとっての博物館、これは基本だが「和算」や「蘭学」や「洋学」など、この地域に留まらず、日本全体あるいは世界に対して発信していける文化力を持った地域なのではないかと思う。そういった一関地域が持っていた文化力をその他の地域にも伝えていく重要性を感じた。

それから学芸員さんの仕事という事で考えてみると、特別展やテーマ展の作品に至るまでの準備過程、下準備に相当時間がかかっている。学芸員さん達の役割というのは、出来上がった作品を見せるところもあるが、その作品の前の様々な手間ひまのかかった仕事、展示品一つ借りてくるにしても、向こうに行って実際見て、作品の状態はどうかをチェックしながら、そしてその運送の手配をして保険をかけて、ここまで来て、それを梱包して、荷解きをして、そして展示して、また梱包して返す。こういった展示するまでに準備がある。そういったところをご理解頂くとよろしいかと思う。

教育長 今、館長さんから、地域の宝を預かる、地域の持っている文化の力あるいは博物館が持っている文化の力を他に広げていくという機能を話して頂いた。

今の時代、これからの博物館はどういう形になっていけばいいのか、あるいはそういう所を期待したいという部分について、今後、話の柱にしていきたい。時代に求められる博物館というのは、それぞれの委員さん方も考えるところがあると思うので、意見をお聞かせ頂きたい。

桂島委員 先程も申し上げたが、どのようにして幅広い世代の方々に、これだけ素晴らしい、展示して学ぶ機会をたくさん与える場所、という事を周知するかという事が課題だと思う。知っている方は、素晴らしい場所という事はわかっているが、まだやはり一関や近辺の方々も足を運んだことがない方もいらっしゃるので、その方達にいかに伝える事ができるのか、伝える場を設けるが事できるのか、というところだと思う。

佐藤委員 資料で頂いた年間案内やテーマ展や様々な体験学習が、身近な広く楽しんだり学んだりして頂くという取組としては、特色ある取組だと思う。

私の経験で、イギリスの大英博物館に行ったことがある。そこは入場料が無料であり、通路にテーブルが用意してあり、コインを持っている学芸員なのかスタッフなのか、触ってみなさいという形で触らせられた経験がある。私も外国人の観光客なので、「これがどこのコインで」という会話ができればなお良かったが、まさか古い歴史資料を実際に触る体験ができると思っていなかったのも、非常に印象深かった。

それから、一関市博物館だけではなく、市内に数館あるが、例えば花巻市だと宮沢賢治記念館に行くと、共通入場券や共通パンフレットが用意されていて、時間があれば他の館も見ては、といったような仕組みがあったり、そういう事があると、広域に

施設があるので、併せて見て頂くという事があってもいいのではないかと思います。今取り組んでいる体験学習等も充実しているので、ぜひ継続して頂きたい。

それから一関市が持っている施設を広く回って頂けるような事があってもいいのではと思う。

教育長 ちなみにこの一関市博物館と「石と賢治のミュージアム」、「芦東山記念館」、「キリシタン殉教公園施設」、この4つの共通入館券があり、私も今年から年齢が無料になったが、去年まではそれを買わせて頂いて、あとは年間どこに行ってもお金を払わなくてもいいという形で利用させて頂いた。そういう連携は今後非常に大事だと思う。

伊藤委員 先程もお話させて頂いたが、身近にある博物館、身近にある記念館、身近にあるミュージアム、身近にある公園という形が一番望ましいと思う。人物や歴史的な資料に興味のある人のみ、心と足が向いてしまう、あるいはその施設に向いてしまうというのが常だと思う。

例えば「石と賢治のミュージアム」だと、コロナの影響前は年間9000人の来場者がいた。しかし、コロナの影響で現在は7000人。それでも良しとする。なぜかというところ公共交通機関が整備されていて、平泉の世界遺産とタイアップしている。東山には猊鼻溪がある。観光客が来て、その足で「石と賢治のミュージアム」に立ち寄るというケースが出ている。そういう形だと、よりいろいろな方に知れ渡る。市のホームページのPRや広報紙のPRのみならず、そういうルートがあると身近に感じられることが多いという事である。

「芦東山記念館」は、渋民小学校が統合前、児童が下校時に記念館に立ち寄るそうである。なぜかというところ、記念館は冷房が効いていて児童が過ごしやすい。遊びも兼ねて立ち寄る。しかし、そこの学芸員の方は「それでいい」「それが市民の身近にある記念館だ」と。そういう児童が来た時には学芸員の方は、芦東山の説明はしない。ただ、この方は儒学者でお百姓さんにはすごく親切な方だったという事は教えるそうである。その学芸員さんは、そうやって身近に感じてもらい、大人になって自分の故郷に大切な遺産があるという事を誇りに思って生きていけるという言い方をされていた。そういう身近にある記念館であってほしいと話していたが、残念ながら統合した後は、児童も足が遠のいてしまった。

また、課題として、公共交通機関が十分に整備されていない。一日1回か2回来るバス停があるが、バス停から1キロ以上あると、見たいと思っている方は難儀されている。近くには飲食店もない。食堂もない。宿泊施設もない。こういう事が入場にすごく関わっている事が課題だと話していた。ちなみに芦東山は年間2000人程度なようである。

そういう事を鑑みれば、やはり身近にある事が望ましいと。では、どうすればいいか。考えられる事は、このような素晴らしい博物館等を地元の小中学生と連携をさらに深めていけば、なおいいのではないか。例えば、数年前に二戸で委員の研修会があった。その時、世界遺産登録された御所野遺跡に行ったが、私達を案内して説明してくれたのは、一戸町立一戸南小学校の4年生5年生の生徒だった。3人一組で私達を案内したが、その案内と説明は斬新で素晴らしかった。わかりやすく、非常に興味も持った。子供達も当然、御所野遺跡に対する歴史的な知識を身に付けているが、そ

ういう連携と、子供達にとっても身近、地元にとっても身近というふうな形が非常にいいのではないか。子供達は、御所野遺跡愛護少年団に所属して説明をしているという事だった。そういうふうな形で、身近にある博物館の価値観を理解させて広めていくというのが大事ではないかと思った。

教育長 連携の話が出てきたが、市長の最初の挨拶にも美術館や、委員さんの中からも観光との連携など、そういった博物館単独ではなく連携という視点で考えた時に今後どうあればいいのかという部分を考えなくてはならない事があると思う。

市長の立場から考えを聞かせて頂きたい。

市長 考え方というのは、今のところ、これと言って方向付けも、どうやったらいいかというのは非常に難しい。まず、分野が違うという事が一つ。美術・絵画・人物など様々出てくる。それ全体を一つにまとめてやるというのは、なかなか大変である。他の自治体を見ても、そういうところが一番大変なようである。もう既に出来上がっているものもあり、水沢は偉人の里と言われているくらいであるから、後藤新平、高野長英、斎藤実の三人を中心として偉人の記念館がそれぞれ独立してある。それぞれ理由があって場所が決まっているようだ。生誕の地に建てるケースが多い。それをどうやってまとめていくかという事になると、課題がいっぱいありすぎて非常に難しい。連携を取る場合については共通入場券のような形でやるしかないと思っているし、ストーリー性があればいいのではと感じている。旅行したい方々は単に有名な観光地だからというだけではないと思う。旅の情緒など、そういう所が出てこないとなかなか難しいと思っている。それをどうやって情報を発信していくかという事が、あれこれ考えたが、ひとりではいい案が出てこない。

私は、情緒というものをどうやって政策の中に持っていけるかというあたりが、一番のカギになるのではと思っている。確かに難しい話だが、そこをやっていかなくてはと思っている。

それから、今日見学した博物館について言えば、私達は展示されているものを見るという事だけだが、そうではなく、もっと地元の間、地元の子供達の立場から見ると、そこにもストーリー性をつけたい。展示されるに至るまでの間に博物館というものが、博物館の学芸員さん達がどういう仕事をしていて、企画を立てたり、展示するものを借りに行ったり、借りてから展示の準備の作業がある。そして展示の本番を迎える。それで終わりではなく、また返しに行かなくてはならない。その間、責任を持って保管しておかなくてはならない。様々な事があると思う。そういう博物館というものを子供達も含めて住民に理解してもらうためには、出来上がった展示、本番だけを見てもらうのではなく、そういう試みもあっていいのではと感じた。

今、要望がたくさん出ている。美術館を何とかしてくれというのも頂いている。一関の場合は学者の町だという事で、賢人の記念館をつくったらどうかという要望も頂いている。一気にそこまでは難しかったので、駅から上ノ橋通りがそういう道になっている。モニュメントがたくさんある。あの中も、本当にこのままでいいのだろうか。ゴミステーションが隣にあたりする。環境的にもどうなのかと思うところもあり、今度、図書館の前の自転車をおる程度集約して。その他にも田村の殿様の分については、釣山下の駐車場に殿様の屋敷があったので、駐車場の横に移したりと、様々やって

いるが、これを全体的にやっっていくとなると、かなり大掛かりな作業になっていくのかなというのがある。

連携というものに対する答えには全然なっていないが、やはり連携は難しい。だから諦めるかというのと、せつかくの地域の財産をどう生かしていくかを考えた時には、最後はどうにかして連携を組ませなくてはいけないと思う。それを、できれば市民の皆さんの意見を聞いて、その中から、こうすればできるのではないかという事がつかめていけばいいのではと思っている。

教育長 市長からは、連携の中で、ストーリー性のあるというキーワードが出てきた。そういう部分での連携を深めていくという事や、まち自体を、文化性のあるものが随所にあるような役割というのは非常に大事なのではという事を聞き取った気がする。

千葉委員 私も伊藤委員さんの意見を受けて、博物館はもっと学校との連携を深める事が大切なのではないかと思う。今、一関の先人の出前授業をやっているという話を聞いた。

また、博物館に来た子供達に、上に三つ、下に六つというそろばんをどう使うか。小学生20人に考えさせたらかなりいろいろな意見が出て、もしかしたらこれが正しいのではないかというようなものも出てくる可能性もあるなというふう感じた。そういう自分達が考えて楽しくなるような、そういう博物館になればいいなと思う。

それから、市内の小中学校から来るのが遠いので、遠足でもいいし、総合学習の時間でもいいので、博物館に来る話があったら、市の方からバス代を補助してバスをチャーターして、博物館を使いやすいようにする事や、御所野遺跡の説明を小学生がやっていたという関連で、屏風のところで学芸員さんが説明してくれたような内容、紙を伸ばす事の大変さや墨で書いたものは消せないで、紙を貼ってその上に下絵を書いたような話は、すごく感動した。本物の屏風を見る以上にそちらの方に感動する人が多いのではないかと思う。それを小学生にやらせたい。今月7月は山目小学校の5人なり10人来てもらい、特訓して実際に来たお客様に説明する。来月は一関小学校が展示の中で、自分はこれを説明したいというものを選んでやってもらうというような、博物館と学校との関りを深めていくという事が大切なのではないかと思う。

ちなみに私の娘は大変歴史が好きで、夏休みのたびに歴史の研究をしていたが、その時に博物館にもお世話になり、博物館に関する関心を高めて、高校時代には古文書の研究をしたいと言ってやり始めた。大学に行っても学芸員になるという夢を持ち続けて、今、東京の国際美術館で学芸員をやっている。そのように、小学生が博物館と関わりを持つ事によって関心を高め、その方向を広げて行きたいという方に進んでいけばいいのではないかと感じた。

教育長 学校との連携という部分で、非常に斬新なアイデアを含めて紹介して頂いた。小学校はスクールバスを使って来るので無料でできるが、今日この会場を使わせて頂いて、こんなに素晴らしい眺望で、小学生が来ればここでお弁当を食べるのにも非常にいい場所になるだろうなと思いながら、いろいろなアイデアと連携が広がるのではないかと思った。最後に館長さんの考えをお聞かせ頂きたい。

菊池館長 連携といっても、今お聞きしたのはいくつかのレベルがあると思う。一つは博物館同士の連携という話が出ていた。いくつかあるが、中でも一関市博物館はその中核的

な役割を果たさなければならぬだろうと思う。それぞれの博物館が、それぞれの特色やテーマを持ってやっているので、個別の特徴をそれぞれの博物館が果たしていくという、連携と役割分担をきちんとしていく事が大切だと思う。

もう一つは、この博物館は旧一関市の時代に作られていて広域合併もしたので、車でもない限りなかなか移動ができない距離である。そういう広域の中での連携という事の難しさもあるのではないかと思う。そういう事も考えながら、ここの館の役割とそれぞれの地域におかれている館との連携と分担をどのように整備していくかが一つなのではと思う。

また、学校教育との関係と問題かと思うが、博物館は社会教育の一環として法律的に位置づけられている機関だと思うが、その中で学校教育との関係を考えていくという事だが、博物館では出前授業をしたり受け入れたり、いろいろと企画をしているが、近代の歴史を考えると地域の文化や教養教育を誰が担ってきたのかという事があると思う。それは小学校や中学校の先生達が地元の歴史や伝説や自然や地理などを学んでいたかと思う。今、学校の先生達は、そういう部分に時間を避ける事が出来ない。子供達の成長や様々な悩みに対応していくようなところが中心になってきているのではないかと思うので、なかなか地域の歴史や文化や自然に目を向けていく事が弱くなっていると思うが、そこも見て頂きたいという事が私の考え方である。

また、学校の統廃合で学校資料がなくなっていくという事で、学校史を見てみると地域の様子がよくわかる。戦前、学校は地域中心で、そこに地域の人がいっぱい集まってきた。そういう場であった。その後、学校は学校、教育という事だけに縛られてきてしまった感じがする。

近代校の歴史を考えてみると、学校の現場の先生が苦手な部分を博物館の専門職の人達がそこを特化してやるべきではと感じる。全国的にみても学芸員の数はとても少ない。大学で学芸員課程を希望してもほとんどの人は学芸員になれない。資格を持っている人はたくさんいる。学芸員になるためには学校教育から大学院に行って、それでも一人前に育っていくには10年位かかる。先程の紙の伸ばし方や掛け軸の書き方など、全部習得しなくてはいけない。技術職でもある。そういう手間ひまのかかる人達である。

そういう点でもう少し、博物館としても勉強の中で努力をしていこうかなとは思いますが、もう一方で学校の先生達がもっと博物館に足を運んで頂いて、先生自身が説明できると、こちら負担がなくなるのではという感じがしない事もない。こちらがやる部分と、先生にある程度引き受けて頂ける事があるといいのではと思った。

ある博物館では、教育現場から学校の先生が博物館に一時的に異動して来て、そこでそういった対応をするというスタイルをとっている博物館もある。それから、ここを見ていると近くに有名な観光地があり、大体が大型バスでやってくる。今はコロナで来なくなったが、あとは外国人の方々である。そういう方は全然ここにはやってこない。そういう外国人の方が入ってくるというのは難しいのかなと感じる。国内の方々ならそういう事はないと思うが、その際に博物館の入り口が入りにくいという印象を持つ方が随分多いようだが、博物館の建物に入りやすい姿勢になっているかを点検していかななくてはならないのかなと感じた。

教育長 みなさんからいろいろな考え方を出して頂いた。特にも連携という部分では、地域との連携、学校との連携、他の館との連携、様々な考え方があるという事で、たくさんのお話を頂けたと思う。

10 担当課

市長公室政策企画課